

エアリルとキャリバン

ラテン・アメリカにおけるシェイクスピア的人物の文化史への 覚書

大橋洋一

エアリエル／アリエル 1999 年にアーデン・シェイクスピア（第三シリーズ）に新たに『テンペスト』が加わったとき（Vaughan & Vaughan 1999）、その付録に、ホセ・エンリケ・ロドの『アリエル』からの抜粋（英訳）が収録された画期的出来事に対し、快哉を叫んだ誰もが、同時に適期を逸したのではと違和感を抱かずにはいらなかった。なぜロドの『アリエル』か。いまやエアリエル／アリエルではなくキャリバンの時代だというのに。

『テンペスト』の新しい版本の編纂者ヴォーン夫妻は、この時すでに『キャリバンの文化史』（Vaughan & Vaughan 1991）を出版し、作品のアフターライフ（受容史、文化史）に関心を集中させる研究者たちであってみれば、新たな『テンペスト』の版本の編纂を任されたときも、そのイントロダクションや付録において受容史や文化史的影響に力を入れたのは当然とも言えよう。このシリーズでは作品が執筆され上演された時代の周辺資料を付録に掲載するのが普通で、受容史は、もっぱら演劇史あるいは上演史（それも英米圏が主）に限られるのだが、こともあろうにウルグアイの知識人が 1900 年に弱冠 29 歳で世に問うた異色の評論『アリエル』からの抜粋が掲載されたのである。これは異例のことだったが、しかし『テンペスト』は、シェイクスピア作品のなかで、死後の生が活発であった稀有な作品のひとつ、つまり再読や再解釈に開かれた作品であるばかりか、特定の時代や地域の意味付けに貢献する寓意の源泉ともなった稀有な作品のひとつなのである。とすれば最初の問題にもどる。なぜエアリルか。二年後には、たとえばパジェット・ヘンリーの『キャリバンの理性』（Henry 2000）が出版されている。すでにキャリバンの時代だったのだ。

シェイクスピアの『テンペスト』は、地中海の孤島に娘と暮らす魔術師プロスペロが魔法で嵐を起こし、近くを通りかかったナポリ王一行を載せた船を難破させるところからはじまる。プロスペロは実はミラノ大公で、14 年前魔術研究に没頭し政務を弟に任せたところ、ナポリ王と共謀した弟に大公の地位を奪われ、幼い娘ミランダと海に流されたあげく、からくも孤島に漂着。その島でプロスペロは、かつて魔女につかえていた妖精エアリエルと、魔女の子キャリバンを救い家族に加える。だがキャリバンは娘ミランダをレイプ

しようとしたため養子から奴隷の地位へと降格されてしまう。そこにナポリ王一行が漂着すると、プロスペロはエアリエルに命じて一行をさんざん苦しめる、その一方でナポリ王子と自分の娘ミランダとの婚姻を画策する。キャリバンは漂着した二人の酔漢とプロスペロへの反逆を企てるが失敗する。すべてが明らかになり、プロスペロは弟を許し、ミラノ大公の地位をとりもどし、ナポリ王とキャリバンも許し、娘とナポリ王子の結婚を実現させ、エアリエルを解放する。さらにプロスペロは魔術の杖を折り、魔法の書を海中に沈めて、ミラノへと帰還の途につく。

劇作家が単独で書いた最後の作品として名高く、魔術を捨てるプロスペロの姿のなかに、ロンドンの演劇界から引退し故郷に隠遁するシェイクスピアの最後の別れの挨拶をみる解釈は、植民地主義解釈以前では、ごく一般的であった。エアリエルは、その名のごとく空気・精霊的であるがゆえに形而上的存在——さしずめ精神、理念、観念、言葉——となり、キャリバンは、その対極として肉体的・形而下的存在となる——キャリバンは、土、土着性、欲望の化身、そして身体そのものである。言語（エアリエル）と身体（キャリバン）を駆使する芸術家プロスペロが、両者を解放して引退する。その姿が、ロンドンの演劇界から引退して故郷にもどろうとするシェイクスピアと重なるわけである。

ナポリとチュニジアとの航路上の孤島という地中海世界のなかで展開する夢幻劇が、なぜカリブ海地域あるいはラテン・アメリカとアレゴリカルに接続するかといえば、そもそも魔術師で孤島の支配者、協力的な妖精と反抗的な土着民との葛藤というプロットが、図式的な単純化を経ることで、そのまま被植民地世界全体の歴史と共鳴するからだ、同時に劇の意匠において、たとえばキャリバンCalibanの名が、新世界の食人種Cannibalのアナグラムであったり、嵐の描写に、当時、派遣船団中、難破した旗艦の記録を劇作家が参照したと推定されるふしがあったり、作中にも「常に嵐の吹きすさぶバミューダ島‘still-vexed Bermoothes’」（1.2.229）という表現があったり（ただしVaughan & Vaughanの本文ではBermudaとなっているが伝統的な表記に戻した）、あるいはキャリバンが崇拝する^{フェティッシュ}物神の名がセテボス（マゼランが世界一周航海記で触れているパタゴニアの神の名前）であったりと、劇作家は地中海の孤島を新世界表象で彩ったからである。

だが作品の精密な読みとそのイデオロギー性の読解は、予想されるよりも振幅が大きい。たとえば地中海の孤島は、南国的な樂園的中南米地域というよりも北米大陸の森林地帯を彷彿とさせ、キャリバンは食人種というよりもネイティヴ・アメリカンに近い（とはいえ当時、新世界のあらゆる種族が「食人種」とみなされたのだが）。しかも作品に認められる植民地主義イデオロギーは、英国が北米で植民地事業を細々と開始し、それが失敗する可能性も視野に入れていた時期のそれであって、魔術を捨てて島から去る魔術師という設定によって、植民地時代の開幕に、植民地放棄後の、文字通りポストコロニアルな世界を出現させることにもなった。植民地のアルパにしてオメガ。植民地主義の輝かしい未来を

展望するというよりも、植民地主義の終焉をも見据えた不安な眼差しが『テンペスト』の図式的寓意化に影を落とし、往々にしてその翻案は明確な対立図式を破綻させている。この点を考慮すると、『テンペスト』の文化史的利用あるいは改変・アダプテーションの歴史は、植民地主義的でもなければ反植民地主義的でもないテキストの生産の場と化していて、その両義性が際立つ、いや、むしろその両義性こそが、新たな可能性の源泉のように思えてくる。事態は、たとえばセゼールの『もうひとつのテンペスト』、シェイクスピアの『テンペスト』、そしてロブ・ニクソンの著名だが今では悪名高い論文を翻訳してまとめた『テンペスト』(セゼールほか 2007) の実質的編者(本橋哲也) が想定しているほど、明確でもなければ直截的でもない。そのため『テンペスト』と植民地的読解の両義性を確認することが必要となる。

もちろん両義性は『テンペスト』の読解からいくらでも生ずるが、ここではそれを無視して、プロスペロ、エアリル、キャリバンの三者関係に集約されることが多い図式的イデオロギーに絞ってみればラテン・アメリカ版あるいはカリブ版『テンペスト』の試みもまさにそうであって、たとえば――

エドワード・W・サイドは『文化と帝国主義』のなかで、次のように要約している(なおアッシュクロフトほか(333-338)も参照)。「問題となっていることの基本的形式は、そのまま、エアリエルを選ぶかキャリバンを選ぶかという一連の新しい選択肢に変換するとともによく理解できる。……ラテン・アメリカにおける試み(レタマルは比較的最近、この試みに参加したひとりとして名高いが、ほかにもホセ・エンリケ・ロドやホセ・マルティがいる)は、実際のところ、帝国主義から独立せんとする文化は、いかにして、みずからの過去を想像するか? という問いに対する回答である。ひとつの選択肢はエアリエルがするようにすること、すなわち、自らすすんで、プロスペロの忠実な奴隷になることである。……言うなれば原住民のブルジョワ層なのだ。第二の選択は、キャリバンのごとく行動することである。自らの雑種の境遇を意識して受け入れつつも、それにくじけずに未来の発展をめざして果敢に行動すること。第三の選択は、キャリバンの存在であること。この第三のキャリバンが属するのはネイティヴィズム的でラディカルな民族主義である。そこから〈ネグリチュード〉やイスラム原理主義やアラブ主義が生まれた」(42)。ここでサイドが述べていることは、一読したときの印象とは異なり、それほど簡単ではない。エアリエルとキャリバンの二人に対して三つの選択肢。しかも最終的に選択肢はキャリバンの行動とキャリバンの存在の二つに絞られる。「キャリバンの存在」になるとは、自らの人種の民族的本質を主張することにつながる。それは必要な過程であると同時に必要悪でもあり、その声高な主張は、すぐに抑圧的になり、やがて圧制を帰結させる。「第三世界」における脱植民地後の独立国家が独裁専制政治に向う問題に対する批判を、サイドはフ

ランツ・ファノンと共有している。求められるべきは、ただキャリバンの存在となって解放と独立へと邁進することではなく、そこからさらに他の民族と人種と連帯し、自らをキャリバンと自覚した諸国民が、植民地支配からの解放を目指すことである。キャリバンたちが解放後に一堂に会し「勝利の集会」（エメ・セゼール「帰郷ノート」102 ちなみに邦訳にはこの名高いフレーズが見出せない。意識しているためだが）を言祝ぐことこそ最終目標になる。この道程は、キャリバンの存在になる資格がない者にも開かれている。脱植民地化の過程は、キャリバンとその同伴者たちが、独立に安住することなく、さらなる解放を求め、他の民族、他の国民と連帯することと言えそうだ。この場合、キャリバンの行動をする同伴者とは誰のことか。エアリエルしかない。エアリエルは自らがキャリバンの存在であることを自覚し、それまでのように植民地主義者の協力者や追随者をつづけるのではなく、キャリバンの自由と解放を求めて行動する必要がある。エアリエルもまたキャリバンなのだ。と同時にキャリバンは自己同一性と本質を主張するだけでは排除と対立と抑圧の構造を強化するだけである。自己同一性は最後のよりどころではなく、最終的に克服されるべき一段階であり、存在（局所的な脱植民地化への硬直化）ではなく行動（諸民族のグローバルな解放）を優先させねばならない。キャリバンはエアリエルとして終わらなければならない。

ただし植民地主義の協力者としてのエアリエルの現地人は、植民者による搾取から利益を得ようとするハイエナのブルジョワジーという存在には収まりきらぬ面もある。そもそも植民地化において協力者の果たした役割について注意を喚起したのはサイド自身である。『文化と帝国主義』第3章第5節「協力、独立、解放」と題された章は、近年の研究を踏まえ、植民地化が現地協力者なしには実現しなかったことを確認しつつ、同時に、協力者なくして植民地の独立はあり得なかったことも考察している。協力者は植民化勢力たる西洋に学び、自民族の近代化を通して独立を目指したのである。知的ハイエナこそが独立と解放の鍵をにぎっていた。『文化の帝国主義』第3章第4節「遡航そして抵抗の台頭」のなかでサイドは、戦前と戦後の抵抗思想を考察し、民族運動の興隆期におけるナショナリストの歴史物語と、ポストコロニアル時代のアカデミックな研究者の歴史記述を比較検討している。訳者あとがきにも書いたのだが、サイドの共感は、戦前の C.L.R. ジェイムズやジョージ・アントニウスという、西洋と非西洋のふたつの世界で活躍したふたりの巨人に向けられている。以下、引用すると「もちろん戦後の歴史研究者を軽んじているわけではない。……ただ、現代の新しい歴史家たちへの、物足らなさをにじませた眼差しには、歴史書が歴史物語からアカデミックな歴史記述へと変化しただけではない理由もありそうだ。……戦前の巨人たちは、いっぽうで帝国主義を憎み、批判しながらも、西洋文化に対する造形の深さもあって、西洋文化を最後まで捨てることはなく、その主張も、強烈的な民族意識を前面に出すようなネイティヴィズムにはいたらなかった」（「訳者あとが

き」、サイド 263-264)。なぜか。それは重なり合う領土、からまりあう歴史のせいである。西洋と接触のなかった地域は存在しない。植民地化されなくとも西洋化されなかった地域はない。自らの民族の歴史を回顧するとき、不純な歴史しかない。純粋な民族的・人種的自己は捏造にすぎない。そうした捏造の産物たる純粋なアイデンティティに拠る政治は畢竟、根拠のなさを隠蔽すべく暴力的な排除へと向かう。

西洋から学んだナショナリスト（実際彼らは西洋に留学した）vsラディカルなネイティヴィスト——この対決は、結局、エアリエルとキャリバンのそれではないだろうか。どうやらサイドも、また「第三世界」のネイティヴィズムの原理主義的ナショナリズムの惨状をみて、可能性の中心はキャリバンではなくエアリエル、もしくはエアリエルのキャリバンだと認識しているようだ。はたせるかな『文化と帝国主義』の「協力、独立、解放」に戻ると、そこでサイドはふたたびロドの『アリエル』について触れている——「ネイティヴィスト的傾向に対するもっと興味深い論評を提供してくれるのは、クレオールあるいは〈メスティーゾ〉文化に関する、たとえばロドの『アリエル』とか、ラテン・アメリカの寓話作家たちによる記述であって、彼らのテクストがこれみよがしに示しているのは、紛れもない不純さであり、……濃密にからみあった諸系列からなる歴史であり、この歴史は、直線的物語とか、あるいは、いとも容易に回収できる「本質」とか、さらには「純粋な」表象という独善的なミメシス観念を、笑い飛ばしてしまうのである」（144）と。「不純」というのは、もちろん肯定的に使われていて、協力者＝エアリエルの二面的でハイブリットな不純さこそ、威勢はよくマッチョなだけのキャリバンの主張に対する別の選択肢なのである。そしてサイド自身が西洋化されたパレスチナ人として西洋に学んだ解放論者として、エアリエル性を強く保持していることは言うまでもないだろう。

ただしこう書くと、サイドがキャリバンの寓意的表象を否定しているように思われるかもしれないが、キャリバンのイメージの有効性と可能性はサイドにあっては決して失われていない。ただ、その主張が、主張者の意図とは裏腹にキャリバンではなくエアリエルを含意することを指摘したいのであって、サイドは、キャリバンのイメージを否定していない。否定するのは、次の——

ロブ・ニクソンである。発表当初はよく読まれ、さかんに引用された（かくいう私も引用したことがある）基本文献のひとつであったが、ナイポールの研究者にふさわしく、「第三世界」において解放の戦いが抑圧的専制でしかないと主張する反動的なものとなっている——そのためニクソンの議論は、現在の保守派が弄する修辞の特質を見るにはよい材料となる。ニクソンの議論は『テンペスト』書き換えの文化史に終止符を打つものだった。そうなる理由のひとつは『テンペスト』の第三世界における書き換えが、男性中心の闘争の物語に終始して女性を無視したこと。そしていまひとつの理由が第三世界のナショナリ

ズムの惨状をみるにつけても抑圧されたキャリバンが失った土地と主権を奪還する物語が現状にまったくそぐわなくなったこと、つまり植民者からの解放と独立を求めるキャリバンの戦いは独立後の権力闘争のなかで破綻するしかなくなったのだ。もちろんニクソンは、読み換えが第三世界の文化史のなかで一定の役割を果たしたことは認める——「一九五〇年から七〇年代前半にかけて……伝統的に差別に固執してきた者も伝統的に差別されてきた者も、『テンペスト』を評価し、その評価をめぐる争ってきた。……〔植民地出身の作家や知識人たち〕は、中心的な伝統の外部から、受動的、追従的にではなく、一連の反抗的肯定とでも呼ぶべきものを通じて、この戯曲の重要性を再認識したのだ。カリブ海およびアフリカの歴史の中でも、激動と反乱に満ちたあの時代にあって、従来排除されていた文化が「普遍的な」西洋の価値の殿堂に入りこみ、西洋の価値はグローバルに通用するのだという見せかけを内部から攻撃することを可能にした点で、『テンペスト』はトロイの木馬の役割を果たしたのである」（ニクソン 120）と。『テンペスト』の書き換えの有効性は70年代以降消滅した？「力に訴える反植民地主義的精神は鈍り、土着の文化を再構築しようという自信に満ちた呼びかけは鳴りをひそめた」「このような状況下、シェイクスピアの戯曲は、それが持つとかつては考えられていた直接的で重要な価値を失うことになった」（119）。植民地の独立達成後は、『テンペスト』の価値は、そのプロットが尽きてしまうと色褪せた」（118）。ここには、キャリバンの抵抗が効力をもった英雄的独立運動の時代は去り、権力闘争の時代に取り替わられたという第三世界イメージを固持したいニクソンの欲望のみ際立っていて、結論先取の議論しかない。訳者の努力には敬意を表したいが、編者はよくこの論文を載せたものだ。『テンペスト』の現代的意義を説こうとする選集のなかに。

ニクソンはまたジェンダー偏向性を突いてくる——「女性からの異議申し立てが増加する時代にありながら、彼女たちの挑戦やリーダーシップといった主題を引き出すのが難しいことが、同時代のアフリカおよびカリブ海における『テンペスト』の重要性をより一層低下させることになった。……この戯曲に自らの運命の表現を見出した作家たちが皆男性であったのは驚くべきではない」（119-120）と。ちなみに今では常套的になった女性的要素の抑圧の指摘は、フェミニズムの時代になって生じた現象ではない。植民地時代に植民者側は原住民男性の面目を汚すために、原住民文化の後進性と父権的暴力を強調し原住民女性の解放と救出をめざした。この戦略を批判した古典的テキストは、フランスによるアルジェリア女性に対する救済の真意を暴いたファノンの「アルジェリアはヴェールを脱ぐ」（『革命の社会学』所収）だが、ここではヘミングウェイの「インディアン村」を考えてみたい。主人公ニック・アダムス少年の父親で医師は、出産に苦しんでいるネイティヴ・アメリカンの女性をジャック・ナイフ一本で帝王切開して母親と子供を救う。しかし、その勝利感に水をさすかのようにネイティヴ・アメリカンの男性（夫）は自殺する。自殺の

理由は説明されていないが、白人男性（ニックの父親で医師）に面目を潰されたからだろう。白人医師が、高度な精密医療設備が整い支援体制も万全な病院でネイティブの女性を助けてもネイティブ・アメリカンの男性は負けた気にはならない。しかし医療機器がなくジャック・ナイフ一本で帝王切開手術をするニックの父親は、ネイティブ・アメリカンの男性と同じ土俵に立つことになり、ここに名誉システムのスイッチが入る。白人との素手の殴り合いに負けたら確実に名誉を失うという論理。出産に苦しむ妻を前にしてなすすべもなくふて寝するネイティブ・アメリカンの夫と、文明の支援を全く受けないまま素手でその妻を助けてしまう白人医師では後者に軍配があがり、前者は面目を失う。悲劇的なのは、ニックの父親が命を救う過程で命を奪うという逆説だが、同時に重要なのは、ニックの父親ではなく、作者あるいはテキストは、部族的名誉の論理を、文化的無意識のなかに保持し利用していることだ。アルジェリアでアラブ女性の解放をうたった植民地勢力であるフランスも、カリブの植民地闘争を嫌い左翼男性批評家を貶めようとするロブ・ニクソンも、女性を救うことの政治的意味を知悉している。この単純な三段論法で言えば、ロブ・ニクソンは原住民男性を抑圧する植民地主義者と同じなのである。

ただし、だからと言って女性性の抑圧に関する指摘が、すぐに植民地主義的抑圧を帰結させるとか、フェミニズム戦略がこのことに無自覚だと指摘したいのではない。たとえばサイードは、ルナンの文献学における「独身者的かつ科学的」なオリエンタリズムを批判して、そこにあるのは「荒涼とした、狂おしいほど男性的な世界である」と喝破し、「実のところそれは、父や母や子供のいる世界ではなく、イエス、マルクス・アウレリウス、カリバン、そして……太陽神のごとき男たちの世界なのである」（『オリエンタリズム・上』335）と述べるが、これは、ロブ・ニクソンによる、革命家レタマルの寓意化を批判した言説と驚くほど似ている——「英雄的な反乱はすぐれて男性の領域であることが前提とされているのは、フェルナンデス・レタマルが、カリブ的なものを体現していると彼が考える三十五人の活動家と知識人のリストの中に、女性を一人しか加えていないのを見れば明らかである」（120）。だがこれは似て非なるものであり、方向性が異なる。差別的な上から目線の嘲笑と高尚なものを引き摺り下ろす下からの哄笑とが、笑いを共有しているからと言って同列に置けないのと同じで、ニクソンの言説は、ファノンが正しく指摘したように、女性の抑圧を指摘することで、女性の解放の可能性をも抑圧している。

だが、ラカンのいうと手紙は宛先を変えて差出人に送り戻される。ニクソンの断定を受けて、

ジョナサン・ゴールドバークはこう反論する——「ニクソンの議論は、にもかかわらず起こってしまったことを排除しているように思われる。つまりフェミニストたちによるこの戯曲との関わりである。フェミニストたちは、彼が想像するよりも多くの可能性を見て

いる。……そうした可能性は、『テンペスト』における男色者と魔女の形姿によって促されるものであり、そこから一連のカリブの作家たちや理論家たちの著作に見出される非規範的なセクシュアリティの「怪物的」可能性へとつながることになる」(Goldberg 63)。ゴールドバークの著作における驚異的な読解と、そこから生まれる可能性について、ここで紹介する余裕はないが、フェミニストたちと『テンペスト』との驚くほど濃密な文化史を参照しながら(カリブ海地域を離れても、この濃密な文化史はかわらない——仏文化圏については Zebus 参照)、ゴールドバークは、「キャリバンの女」とミランダの問題圏を整理しつつ、新たに構築し、豊かな可能性をフェミニストたちの仕事から抽出している。その情報量は、ニクソンの断定が虚偽的捏造に思えるほどのもので、レタマルを批判して「キャリバン的なものを体現していると彼が考える三十五人の活動家と知識人のリストの中に、女性を一人しか加えていない」と語るニクソン自身が、政治寓意的読解を試みたアフリカ系・カリブ系作家たちのなかに女性を一人しか付け加えていないことの偏向性が改めて浮き彫りになる。ゴールドバークはトニ・モリソンの『タール・ベイベー』を『テンペスト』のアダプテーションとみていて、これはすぐれた指摘なのだが、ニクソンはモリソンを無視している。ただ気づいていないだけかもしれないが、気づいていたとしても無視しただろう。「荒涼とした、狂おしいほど男性的な世界」とルナンの言説を批判したサイードの言葉は、男性作家や男性知識人しか遡上に載せなかったニクソンの議論にも、そのままあてはまるのだ。

繰り返すが、ここではゴールドバークの所説を詳しく紹介し考察する余裕はないものの、そのクィア的読解は、『テンペスト』におけるエアリエルとキャリバンの変態性を精緻に暴き従来の観点に再考を迫る点で出色であり、歴史的文化史的にみて新世界の食人種たるキャリバンがクィアな存在であることを喚起している点でも参考になる (Goldberg 1992, 2010 も参照)。ひるがえってキャリバンを革命的独立の英雄として持ち上げる側の主張にはクィア・キャリバンが見いだせない点が問題となろう。またクィア性をいうならばエアリエルも負けていない。そもそもアルジェの魔女につかえ、口にできない罪深い行為によって罰せられていたエアリエルの謎はまだ解けていないし、演劇史的にみて女性が演ずることも多かったエアリエルは基本が両性具有なのである……。そこで、ここでは、そもそもエアリエルが、キャリバンとの関係で、どのようなイメージを帯びていたかを確認すべく、ひとつの始まりに戻りたい——

ホセ・エンリケ・ロドに。ロドの『アリエル』の英語訳は新旧二種類あって、どちらも、アメリカ合衆国の外交官がらみの企画として存在しているのが興味深い。ロドは合衆国のことを批判しているのだが、その政府の関係者に、ロドの本は訴えるところが大きかった (Roman 93)。新しい英語訳にはカルロス・フエンティスの序 (Prologue) が伏せられて

いて、フエンティスは開口一番こう述べる——「これは、きわめて苛立たしい本である。スペイン語ではそのレトリックは耐え難いものとなっている」(13)。最後の一節でもこうまとめる——「苛立たしく、耐え難く、素晴らしく、刺激的で、がっかりさせるロド」(28)と。私と同じように、スペイン語が読めない読者には、ロドの散文の苛立たしさと修辞の耐え難さを実感できるかもしれないため、お薦めしたいのは、翻訳のあるホセ・マルティの文章である。キューバ革命の精神的支柱ともなった思想家の文章は翻訳でも驚くほど読みにくい。文彩が豊富で隠喩が錯綜し表現が修辞的人為性を誇示し、「文学的」すぎるのだ。同じくロドの文章は英語で読んでも異様にわかりにくく、その修辞的表現はバロック的なものを好む私にとっても心地よいものではなく、まさに苛立たしい。

このロドの著作は、プロスペロとあだ名される老教授が最終講義において、エアリエルの像の横に立ち、若者たちに向けて語った贈る言葉という体裁をとるものであって、枠組みは架空のものだが、本論は評論・エッセイに近い。以下、内容について本橋氏の要約を借りると――

この作品〔ロドの『アリエル』〕は、パンアメリカニズムに対抗する言説としてのラテンアメリカ主義を強化するもの、という文脈の中で読まれてきた。一八九八年の米西戦争に代表されるアメリカ合州国の拡張主義路線への危惧を背景として影響力を増したラテンアメリカ主義とは、概略すれば、アングロ・サクソンとラテンアメリカの侵略を非難し、後者は優れた精神性を元に前者の物質性に対抗しなくてはならない、という主張である。全八章からなるこのエッセイは、大先生であるプロスペローが即興に行なう講義という構成をとっている。五章までは、プロスペローが弟子たちに諭す一種の人生訓話で、芸術、美、徳、真実、感受性を求め、注意すべきは、唯物主義と功利主義であると言う。そのうえで六章と七章でプロスペローは、スペイン系アメリカを代表するアリエルの精神的優位が、北アメリカの物質主義の権化であるキャリバンを教化することによって、やがては民族の調和を達成し得るという希望を説く。最終章でプロスペローの演説が終わると、弟子たちは彼と握手してから去っていくのだが、ただ一人そこに残ったエンホルラスという日雇い労働者から、知性の起源である単独者によって支配される愚昧な民衆という図式が提示される。民衆がキャリバンのように野蛮であり続けるか、アリエルのように文明化するかは、民衆自身の能力によるのではなく、支配者による同化と選別と教育によるのだ。最後に語る労働者、それを是認しながら見守る師プロスペロー、そして終始沈黙して語らないアリエルの銅像という知性的権力の象徴によって、具体的な民衆の存在は隠蔽されるのである。(本橋 341-42)

ロドの文章の苛立たしさは、彼が、マルティとともに、いわゆるルベン・ダリーオの新体詩運動〈モデルニスモ〉に属しているからであり、この弊害は本橋氏の概ね正しい要約に

誤解や牽強附会を引き起こしている。2012年に日本でも公開されたミュージカル映画『レミゼラブル』を見ながら本橋氏は苛立ちからくる自分の過ちに気づき後悔しているだろうか。「エンホルラス」というのは日雇い労働者ではない。英訳にはエンホルラスの説明はないが、『レミゼラブル』の読者あるいはミュージカルや映画の観客なら、そこにエンホルラス／アンジョルラスが重要な人物として登場しているのを知っているだろう。バリケードに立ち民衆を指導する学生のリーダーが彼なのである。最後の部分を引用する――

Y fue entonces, tras el prolongado silencio, cuando el más joven del grupo, a quien llamaban *Enjolrás* por su ensimismamiento reflexivo, dijo, señalando sucesivamente la perezosa ondulación del rebaño humano y la radiante hermosura de la noche:

——Mientras la muchedumbre pasa, yo observo que, aunque ella no mira al cielo, el cielo la mira. Sobre su masa indiferente y oscura, como tierra del surco, algo descende de lo alto. La vibración de las estrellas se parece al movimiento de unas manos de sembrador. (231)

【二つの英語訳でエンホルラスに関係するところだけを掲げる...the youngest of the group——they called him “Enjolrás” because of his ardent thought——spoke, pointing out first the idle movement of the human herd and then the radiant beauty of the skies”(150) ; ...the youngest of the group, the one they called “Enjolras” on account of his resemblance to Hugo’s pensive character, pointed to the meandering human flock, and then to the radiant beauty of the night:”(101)】

新しいほうの英語訳は、原文にないヴィクトル・ユゴー (Hugo’s pensive character) の名を補って『レミゼラブル』との関連を暗示しているが、ここにあるのは、革命の指導者となり民衆を覚醒させつつ、自らは銃弾に倒れ一粒の麦となって革命の大義を広めるという伝統的な革命家の覚悟をモデルニスモ的文体でつづったものであり、エンホルラスを「日雇い労働者」と理解した本橋氏は（どこからそんな誤解が生まれるのだ）、愚かな労働者が、お偉い先生の教説を真に受けて受け売りすると誤解し苛立っているようだが、そこには、はからずも本橋氏の労働者蔑視が露呈している——おそらく、このエンホルラス／アンジョルラスはプロスペロ＝老教授の講義に感銘をうけて化身したエアリエルであろう。

ただしロドが革命思想を喧伝するかにみえる末尾の一節は、全体としてみると例外的で、ロドの主張の要は、衆愚政治としての民主主義の批判、民主主義のオルターナティブとはならない貴族的寡頭政治への批判、そして功利主義や物質主義から脱却するための、階層秩序を認めた競争的民主主義の主張なのである。また 29 歳のロドの文章には権威づけが顕著で、老教授の最終講義という設定を使い、そしてうんざりするほどフランス思想に言

及する。またルナンとニーチェがそこで遭遇する。衆愚政治としての民主主義はキャリバンが戴冠したものだというルナンの説に賛同するロドは、階層秩序を言祝ぎ、ニーチェの超人思想を賞賛する。このロドの議論はナチス思想の萌芽ともなっている点是指摘するにとどめておくが。

最後の権威付けが『テンペスト』である。退官する老教授をプロスペロと呼び、彼の精神的支柱をアリエル／エアリエルとすることで (Invoco a ARIEL como mi numen/ I call upon Ariel to be my numen.なお Vaughan & Vaughan は付録で英語訳に注をつけていて numen を guiding spirit と語釈している)、プロスペロとエアリエルの文明化使命路線を確立し、その対極として衆愚政治の象徴たる悪平等の民主主義、あるいは功利主義と物質主義に汚染された世界、その代表のひとつとしてアメリカを立ち上げる。ただそのため敵がすべてキャリバンとなって、寓意は明確でも、具体的な顕現の輪郭があいまいなのである。そして暗示されたアメリカ＝キャリバンという寓意は採用されることはなかった。今から考えると合衆国をキャリバンとみる寓意は可能性の宝庫ではあるが (Vaughan & Vaughan, 1991, 118ff 参照)、植民地主義者然としたプロスペロの強権的な姿勢と、蔑まれ差別される非抑圧民族的な呪われたキャリバンの姿勢は、世界の強国としての道を歩む合衆国とシンクロできなくなった。そればかりではない。ロドによる、キャリバン＝民主主義＝アメリカの暗示は、シェイクスピアの『テンペスト』よりも、その続編を書いたルナンの戯曲 (『キャリバン』とその続編『若返りの水』) における反乱に勝利したキャリバンに依拠する部分が大きいのだ (ルナンの戯曲についての紹介として鶴飼参照)。ルナンの戯曲が忘れられるにつれて、ロドの寓意も適応性を著しく欠くことになった。

ロドの評論に通奏低音として存在する主題は、ラテン・アメリカとはいかなる存在あるいはいかなる存在であるべきかであった。キャリバン (野蛮) に抵抗するエアリエル (人文系の観念) を忘れない教養人たらしとすること。これに対し方向性は認めるが命名が誤っていると考えたキューバ評論家で、フレドリック・ジェイムソンによればラテン・アメリカにおけるサイドの『オリエンタリズム』ともいえる評論集『キャリバンその他の試論』の著者――

ロベルト・フェルナンデス・レタマルであった。レタマルは、その評論集の表題にもなっているエッセイ「キャリバン」の冒頭で、「ラテン・アメリカ文化は存在しうのか」(3) という問題をたて、ホセ・マルティの言う「われらがメスティーソ・アメリカ」(4) に、その解答を見出すのだが、すべての文化はメスティーソであるという一般論を確認しつつ、ラテン・アメリカではとりわけ、支配者＝植民者の言語とその文化に汚染されつつ、それを抵抗の道具とせねばならない文化の苦境が顕著であり、ここにはシェイクスピアの『テンペスト』におけるキャリバンの苦境と通ずるものが生まれる。「われらがメスティーソ」

であるラテン・アメリカの文化的シンボルとしてキャリバンこそがふさわしいのではないか。そして「もしそれがキャリバンの歴史と文化なくして、私たちの歴史とは何か、私たちの文化とは何か？」(14)とまで断言するのである。

この断言の前にレタマルは、ロブ・ニクソンの指摘するように「英雄的な反乱はすぐれて男性の領域であることが前提とされているのは、フェルナンデス・レタマルが、キャリバン的なものを体現していると彼が考える三十五人の活動家と知識人のリストの中に、女性を一人しか加えていない」というリストを掲げている。だが同じことはロブ・ニクソンの列挙についてもあてはまることはすでに述べたが、しかしレタマルには、女性性を積極的にか差別する言説はない(たとえ無視という差別はあるとしても)。しかしここでゴールドバーグが着目するのは、レタマルの男性優位的同性愛差別である。それはラテン・アメリカ文学の〈ブーム〉の牽引的存在であった雑誌『ムンド・ヌエボ』Mundo NuevoがCIAに資金援助を受けていたスキャンダルに乗じて、その雑誌に寄稿していて著者のひとりスベロ・サルドウイを罵倒する言葉である――

セベロ・サルドウイの新バルト的なおしやべり。the neo-Barthesian flutterings of Suvero Sarduy(36) mariposeo neo-barthesiano de Severo Sarduy(68)

ちなみに野谷文昭教授は、あるインタビューで、ホセ・ドノソに対し、キューバ出身でパリ在住のサルドウイについて、どう思うか質問しているが、その時サルドウイに無関心なドノソの、適当な答えはともかくとして、その後続くドノソの、イサベラ・アジェンデへの強烈な罵倒的な評言(野谷 195-96)に比べると、レタマルのどこが差別的なのかといふかる向きも多いだろうが、上記の引用の「バルト的」というのはロラン・バルトのことで(その著述にサルドウイが登場する)、バルトがゲイであったことを周知の事実として、やがてエイズで死ぬサルドウイもまたゲイであることの暗示が英訳でいうと flutterings(蝶の羽の振動だが、蝶＝同性愛者の連想がある)、スペイン語で mariposeo(この語も maricon＝同性愛者の連想があるという)に見出せるのだ。ここでレタマルが非難しているのは北米の侵略＝侵入に身を任せた著述家たちで、彼らは、かつてはキューバ革命を支持しながら革命の結果に失望して海外に亡命し反革命派となった知識人や思想家たちであり、北米に「オカマを掘られた」変節漢・裏切り者として断罪されるべきということだろう。その断罪の言説にホモフォビアが炸裂している。反革命への転向者知識人のほかに、最初から西洋の植民地勢力を迎え入れた協力者層(サイドが現地人ブルジョワと呼んだ階層)もまた、肛門性交に身を任せた変態となる。ただしレタマルによれば、『アリエル』のロドは違う。彼は北からの侵入に警鐘を鳴らしたのであり、象徴の使い方を間違えたただけだ。われわれのシンボルはエアリエルではなくキャリバンなのだから(14)。そして知識人としてのエアリエルとは、グラムシのいう伝統的知識人であり、文化革命をめざす有機的知識人と、最終的に共闘する存在となる(39)。エアリエルとキャリバン、マルティ

／ロドとレタマルは同志なのである。

だが、レタマルもシンボルの使い方を間違えている。ゴールドバークによって批判されたレタマルのホモフォビア。だがそれはレタマルの個人的な性向か否かは別としても、また左翼勢力にいまなお根強いミソジニーとホモフォビアではあるにしても、それよりも、キューバの政治文化的風土とも関係しよう。革命の初期に革命そのものの唱道者でもあった同性愛者グループ（Goldberg 8-9）は、革命後に差別の対象となり、革命家は同性愛者ではないと宣言することで、世界に冠たる同性愛嫌悪国となったキューバではあったが、ホモフォビアあるところにホモセクシュアルありの議論も成立する。ホモフォビアの国としての革命後のキューバはまたゲイの国としても世界文学の文化史に記憶されている。たとえばレイナルド・アレナスの『夜になる前に』と野谷文昭教授が訳されたセネル・パスの『苺とチョコレート』（どちらも映画化された）。だがキューバ文化の考察は野谷教授の領域であり私としてはこれ以上の言葉は不可能であるが、ただ、これだけは言えるだろう——革命の敵を同性愛者の身体を基軸にして悪魔化を図るレタマルのホモフォビックな表象戦略は、それを圍繞する強度の同性愛風土と表裏一体化し、ゲイ文化とホモフォビアがまさに脱構築的に——あるいは騙し絵的に——共存している、と。そしてそれが合衆国の軍事侵入に怯えつつ同時にすでにいつも侵入されている文化状況への憤怒と恐怖の叫び、それも状況の声を生んだともいえるのであって、それは決して主流派がマイナーな弱者に向けて放った差別的侮蔑の言説ではない。事実、レタマルの「キャリバン」は1971年パディーリャ事件を契機として書かれ（この事件については、エステバンほか『絆と権力』を参照。なおパディーリャについてはアレナスにも記述がある）、さらにその背景には1967年に発覚した『ムンド・ヌエボ』のCIA資金援助スキャンダル（これによって雑誌は1971年に廃刊となる）の中心的編集者エミル・ロドリゲス・モネガルとの継続的論争がある。サイードの『オリエンタリズム』がパレスチナ問題への解明でありアレゴリーであるとすれば、レタマルの『キャリバン』は革命後のキューバの文化的危機のアレゴリーでもあった。したがってホモフォビアは、オリジナルな文脈に置かれ歴史化されねばならない。と同時にレタマルの言説は、北の侵入に対し、それを肛門成功の屈辱としてホモフォビックに批判した点に限界があった。むしろそこから、文学と政治の相互陥入を探る新たな探求——たとえばラテン・アメリカの政治的文化状況と骨がらみであるとされたマジック・リアリズムが、ことによるとCIAの心理作戦の一環であったという隠蔽された高次の政治性、その破壊性と創造性を、パラノイアにもならず、先祖がえり的に俗流イデオロギー分析に陥ることもなく、探ること——の端緒を見出すべきであった。そしてその暁には探求のシンボルとして、キャリバンこそが、適切なシンボルを提供してくれるはずである。そのキャリバンが、いまだ認知されざる恐怖の存在だとしても——

キャリバンは、『テンペスト』第2幕第2場で、雷鳴とともに近づいてき見知らぬ漂着者をプロスペロが彼を罰するために遣わした妖精と思い、身にまとっていた大きなギャバジンの布を広げ、その中に潜り込んで身を隠す。次に登場する漂着者トリンキュローも雷を恐れ、キャリバンが潜り込んでいる衣の下に、自らも潜り込む。それは俗にいうシックス・ナインの体位となるのだが、ギャバジンの布から二人の四脚がはみ出て、両端に顔あるいは口あるいは肛門があるという奇妙なかたちの怪物ができあがる。そこにさらに酔漢のステファノーが登場し「足が四本、口二つ。なんてすばらしい怪物だ!」と驚くが、知り合いのトリンキュローの声をそこに認めて、布の下からトリンキュローを引き出す——「たしかにおまえはトリンキュロー!　なんでまた、この月の化けもののウンコになっちゃったんだ?　こいつはケツからトリンキュローをぶりぶりと出せるんか?」と。

足が四本で口が二つの怪物。口が二つ?　実は口と肛門?あるいは肛門が二つある怪物?キャリバンから作りだされるこの異形の怪物は、近年のカルト・ホラー映画『ムカデ人間』(*The Human Centipede*, 2010)の口と肛門とを縫合したおぞましき造型をも連想させる。そしてこの糞まみれの肛門からの出産。痙攣的快楽とともに肛門から受け入れ脱糞の痙攣的快楽とともに肛門から産出する身体こそ、ロドが野蛮として恐れ、レタマルがホモフォビアゆえに恐れ見ようとしなかったキャリバンのクィア身体なのである。ここにも、いやここにこそ文化的可能性の中心もありはしないか。たとえそれが女性排除ゆえに最後の言葉ではないことを忘れてならないとしても、肛門性行と脱糞、糞まみれのハイブリッドこそ文化だとも、またラテン・アメリカ文化のみならず、文化そのものが汚れと汚れからのスカトロジックな出産であると言えはしないか。ちなみに本橋哲也はトリンキュローの台詞をオカマ言葉で翻訳しているが、キャリバンこそ、その台詞をオカマ言葉で翻訳されるべき存在であろう。ロドはキャリバンについて語るべきところでエアリエルを語りシンボルを間違えたレタマルは言うが、レタマルもまたホモフォビアゆえにマッチョなキャリバンを語ってシンボルを間違えた。そして本橋もクィア・キャリバンを語るべきところクィア・トリンキュローを語ってしまった。いずれも恐怖ゆえにシンボルを間違えていた。恐怖と嫌悪。フォビアなくしてフィリアに至る日はいつくるのだろうか。

参考文献

- Goldberg, Jonathan, *Tempests in the Caribbean* (Minneapolis: U of Minnesota Press, 2004).
———, *Sodometries: Renaissance Texts, Modern Sexualities*(New York: Fordham U P., 1992, 2010)
Henry, Padget, *Caliban's Reason: Introducing Afro-Caribbean Philosophy* (New York: Routledge, 2000).
Retamar, Roberto Fernandez, *Caliban and Other Essays*, Tran. Edward Baker, Foreword by

- Fredric Jameson (Minneapolis: Minnesota U. P., 1989).
- Rodó, José Enrique, *Ariel*, Trans. by F. J. Stimosn (Boston: Houfon Miffilin, 1922).
- Rodó, José Enrique, *Ariel*, Trans. by Margaret Sayers Peden (Austin: University of Texas Press, 1988) .
- Rodó, José Enrique, *Ariel*, Ed. by Belén Castro (Madrid: Catedra, 2000, 2009).
- Román, Gustave San (ed) *This America We Dream Of: Rodo and Ariel One Hundred Years On* (London: Institute of Latin America Studies, 2001).
- Vaughan, Virginia Mason and Vaughan, Alden T., *Shakespeare's Caliban: A Cultural History* (Cambridge: Cambridge UP., 1991).
- (eds) *The Tempest, The Arden Shakespeare* (London: Thomas Nelson and Sons Ltd., 1999).
- Zabus, Chantal, *Tempests after Shakespeare* (New York: Palgrave, 2002).
- アッシュクロフト、ビル、グリフィス、ガレス、ティフィン、ヘレン『ポストコロニアルの文学』木村茂雄訳（青土社 1998）。
- アレナス、レイナルド『夜になる前に』安藤哲雄訳（国書刊行会 2001）。
- 鶴飼哲「「市民キャリバン」あるいはエルネスト・ルナンにおける精神の政治学」、ルナンほか『国民とは何か』所収、241-268。
- エステバン、アンヘル、ステファニー・パニチェリ、『絆と権力——ガルシア・マルケスとカストロ』野谷文昭訳（新潮社 2011）。
- シェイクスピア、ウィリアム『テンペスト』本橋哲也訳、セゼールほか『テンペスト』所収、149-296。
- サイード、エドワード・W.『オリエンタリズム上』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳（平凡社ライブラリー1993）。
- 『文化と帝国主義 2』大橋洋一訳（みすず書房 2001）。
- セゼール、エメ『帰郷ノート 植民地主義論』砂野幸稔訳（平凡社ライブラリー2004）。
- セゼール、エメ、W.シェイクスピア、アーニャ・ルーンバ『テンペスト』本橋哲也編訳、砂野幸稔・小沢自然・高森暁子訳（インスクリプト 2007）。
- ニクソン、ロブ「カリブ海世界およびアフリカにおける『テンペスト』の領有」小沢自然訳、エメ・セゼールほか『テンペスト』所収、89-120。
- 野谷文昭『ラテンにキスせよ』（自由国民社 1994）。
- パス、セネル『苺とチョコレート』野谷文昭訳（集英社 1994）
- ファノン、フランツ『革命の政治学（新装版）』宮ヶ谷徳三・花輪莞爾・海老坂武訳（みすず書房 2008）。
- 本橋哲也「『ザ・テンペスト』から「ア・テンペスト」へ 訳者解説」、セゼールほか『テンペスト』所収、318-353。
- ヘミングウェイ、アーネスト「インディアン村」、ヘミングウェイ『こころ朗らかなれ、誰もみな』柴田元幸翻訳叢書（スイッチ・パブリッシング 2012）所収、17-26。
- モリスン、トニ『タール・ベイビー』[Toni Morison, *Tar Baby* (1981)] 藤本和子訳（早川書房 1995）。
- ルナンほか『国民とは何か』鶴飼哲ほか訳（インスクリプト 1997）。

Ariel and Caliban

Notes towards a Discussion of Cultural History of Shakespearean Characters in Latin America

OHASHI Yoichi

Ariel and Caliban, an invisible fairy and a monstrous creature in Shakespeare's *The Tempest*, played highly important roles in the Latin American cultural history: these two *dramatis personae* have provided an allegorical key to understand the New World's historically specific cultural status *vis-à-vis* European metropolitan cultures. This essay or what may best be described as some preparatory note tries to trace back the well-trodden path of symbolic changes from Ariel to Caliban, reconsidering their vicissitudes of interpretations and finding out those intricacies and ambiguities which refuse any kinds of recapitulations. Edward W. Said's overview of this cultural history reveals unwittingly some obvious but often neglected importance of Ariel, who, as a collaborator of colonization as well as a creator of independent movements, remains one of the central representations of the intellectuals. Rob Nixon's now notorious essay, a highly devastating criticism of the present-day third world culture and society, can be easily refuted by the discursive strategy with which he attacked the postcolonial rewritings of Caliban, those rewritings which have, according to Nixon, failed to encounter any objective correlatives in their real politics. Jonathan Goldberg's marvelous queer reading opened up some critical space in which we can reconsider two advocates, Rodó, an author of *Ariel* and Retamar, a Cuban critic of the collection of essays *Caliban*. In each discourse Ariel and Caliban get intermingled, crossed and interchangeable, making boon companions instead of opponents in their cultural resistance. Rodó's antidemocratic vision and Retamar's notorious homophobia, two targets of postmodern theoretical attacks, turn out to be some voice of their own situation of historical crisis if they can be put within their original contexts. Any detailed analysis of Ariel and Caliban will reveal that their hitherto conventional images are not sustained only to leave us enigmatic queer monsters for further explorations.